

ある野鳥の死が残した意味

わが家の玄関に街灯を兼ねた門燈がある。結構、高い位置に設置されている。立方体で、オレンジ色のガラス張りの箱に屋根がついている。長期のローンを組んで、苦勞して築いた我が家にしては、おしゃれな格好をしている。そこで起きた一つの残酷な事件である。

ある日のこと、電球に寿命が来て街灯が消えた。電球を取り換えるために脚立を用意した。手が届かない。背伸びをして、やっどこさで電球の取り換え口を探しあてた。どのような仕組みになっているのか全く分からなかったため、色々な方向からいじってみた。苦勞した割には、比較的簡単な仕組みになっていた。正面から軽く押すと、蝶つがいが開き、隙間ができた。

古くなった電球を取り出すために中に手を入れた。ドキッとした。何か得体のしれない、柔らかいものに触れた。ネズミだろうか。いや、動かない。背伸びをしてやっどこさで手が届く位置にあり、覗いてみることはできない。勇気をだして、物体をつまみ、取り出してみた。それは野鳥の死骸であった。きれいな羽の、拳ほどの大きさの大人の野鳥であった。きっと暖を求めて、入ったに違いない。

外から押すと簡単に開く。しかし、その中に入ってしまうと内側からは引っ張らないと開かない。単純な蝶つがいであるが、鳥のくちばしでは引っ張ることはできないし、そのような知恵も持ち合わせていなかったであろう。きっと温かく、心地よく寝込んでしまっただけに違いない。目が覚めた時には、困惑したに違いない。入り口が開かない。押すことはできても、引くことができない。

毎日、定時に灯す街灯である。鳥は、乾燥した形で原型を保っていた。まさか、わが家の街灯が、このような残忍な仕組みになっているとは考えてもみなかった。飢えと渇き、苦しんで息を引き取ったものと思われた。

ふと、ルイス・カッセルズ原作の物語、「あるクリスマスの出来事」を思い出した。「神の御子が人間になられた」。その事実を悟らせる物語である。

人間には人間の世界があるように、鳥たちには鳥たちの世界がある。雪が降り積もり、吹雪のクリスマスイブの出来事でした。道に迷った小鳥の群れが、灯りを求めて窓ガラスに激突、そして次々と死んでいった。小鳥たちを助けようと納屋の戸を開き、温かい寝床を準備したが、その思いは小鳥たちには伝わらなかった。「ああ、私が鳥たちの言葉を聞き分けることができたなら・・・」。

その日は冷え込んだ夕だったに違いない。気取った、暖かそうな街灯。やれやれ、こんな立派な宿はない。喜び、つかの間の幸せな時を過ごしたに違いない。人間に鳥たちの言葉を聞き分けることができたなら、このような残酷な出来事は起きなかったはずだ。すぐ

に手を差し伸べることができたに違いない。

神の限りない人間に対する愛の証として、神が人間（御子）として地上に降り立つことは、必然性があり、必要であり、ごくごく自然なできごとであったのです。「人間の言葉で語り、生きる意味を説いたが、人は聞く耳を持たなかった」。「命をかけて、真実を語ったが・・・人間は信じなかった」。ひとえに、「隣人を愛せよ」と・・・・・・・・。